

が、もつれ、やがて涙は音をたてて畳におちた。
十四歳の信長は、とつぜん大きく笑いだした。
「もううた。もううた。お許の土産をたしかに
もううた。もうよい。」

於大はしずかに頭を垂れて、またしばらく動
かなかつた。
(傍点は原口)

この部分(特に傍点を付したところ)を
読むたびに、不思議な感動が胸に迫って
くる。母親の眞の愛情と眞心とことばの相乗
効果に心を打たれるのである。これは、こ
とばが生きている証拠である。

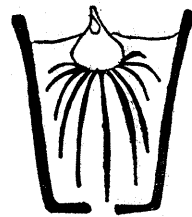
いつの日か、このような人の心を打つ、
生きたことばが使えるようになりたい。こ
れが私の数年来の願ひであるが、まだかな
えられそうにもない。

(はらぐち・くじょう「本名は庄輔」筑波
大学)

冬の息

いきものは皆、息をしています。それ
を強く感じさせられるのは冬のおかげで
す。生まれて四、五回目の冬を迎える子供
達は、一年を大人よりずっと長く過ごして
いるらしく、いつも新しい気持ちで移り来
る季節を迎えているようです。

自分のはいた息が白いゆげとなつてロヤ



豊田一秀

鼻から出てくるようになると、子供はそれ
が何ともおかしく、不思議でそして嬉しく
て仕方がないのです。

白い息、それはいきものが生きて生きて
いることを象徴的に表わしているように私
には思えます。蒸気機関車に根強い人気があるのは、きつとその力強い音とともに上

る煙や蒸気がいきもののような躍動感を我々に与えるからでしょうし、昔よく社会科の教科書で、日本の工業のめざましい発展を書いたページに来ると必ず林立する煙突からモクモクと煙が出ている写真が載っていたのも、やはりあのふき出る煙や蒸気が、活き活きとした雰囲気の人々に与えるからにはかなりませぬ。

冬の園庭もあちこちからポッポッと白いゆげが出ています。すもう、かけっこ、おしくらまんじゅう……。冬の外遊びは心なしか激しい動きを伴ったものが多いようです。

皆精一杯力を出して、ハーハーと息を切らせ、仲間と自分のゆげが混ざり合うのが何とも言えないといった感じです。そんなふきでるような白い息の他にも、朝の庭で子供はタバコをはさんだつもりの指を口元を持って行つては朝の空気を大きく吸いこんでおいて、空に向かってフーッと大きな

溜め息をついては、朝の一服を楽しんでいます。

まどみちお作詞、宇賀神光利作曲の歌に『ゆげのあさ』という曲があります。

一、おはよう、おはようゆげがでる

はなから、くちからポポポ、ポポポ

きしゃぼっぼみたいでゆかいだな

二、おうまもこいぬもゆげがでる

はなから、くちからポポポ、ポポポ

きしゃぼっぼみたいでゆかいだな

三、おはよう、おはようだれもみな

はなから、くちからポポポ、ポポポ

きしゃぼっぼしゅぼぼでゆかいだな

この歌から私は冬の朝を想像します。犬を散歩させているおじさんの口からも犬の鼻からもゆげがポッポッと出ている。そしておはようと言つた自分の口からもやはりゆげがでている。そんな冬の登園風景を私は思い浮かべてしまうのです。

いつだったか先日、一晚中冷たい雨が降

り続いていたのに翌朝になってそれが嘘のように晴れ上がった朝がありました。早目に来た子供がケヤキの細かい枝と高い空に誘われるように庭に出ていくと、しばらくして息はずませて私を呼びにきます。私はこれから来る子供達のことを少々気になりながらもその勢いに押されて手を引かれるままについていくと、そこは遊

戯室の裏の焼却炉の横でした。今は使われていないコンクリートのごみ箱、積んである薪、立てかけてあるスコップの柄、それらが皆やわらかい朝日に照らされて白いゆげを立てています。子供は「ね、」と言つてから、「さわつても少しも熱くないんだよ。」と教えてくれます。私は一日が彼にとってきつと良い日になるだろうと思いつつ、自分がセーターの下にウィンドブレイカーをそつと着こんでいたのを一瞬忘れてしまいました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)